

バスケットボールにおけるリバウンドが勝敗に及ぼす影響

The influence of rebounds in the basketball exerted on victory or defeat

1K09B156-9

指導教員 主査 倉石平 先生

丹羽 裕美

副査 磯繁雄 先生

【諸言】

歴史バスケットボールは 1891 年、J・ネイスミスによって創案された。1905 年頃に全米の各大学のウインター・スポーツとして普及・定着し、リーグや連盟が組織されていった。

ウィッセルは「リバウンドを支配できるチームがゲームを支配できる」と述べていることから、試合展開におけるリバウンドの重要性が予想される。

早稲田大学バスケットボール部は、2011 年 9 月 1 日から 10 月 21 日に行われた第 62 回関東大学女子バスケットボールリーグ戦において 4 位という結果で終えた。リーグ戦での敗戦を活かしリーグ戦から当インカレまでの期間、チームとして練習でリバウンドに集中して取り組むことを決め、徹底して練習を行った。その結果優勝という成績を残すことが出来た。その結果から、リバウンドが勝敗に及ぼすのではないかと体感した。そこで、実際にリバウンドは勝敗に大きな影響を及ぼすのかを検証することとした。

【目的】

本研究では、リバウンドが勝敗に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。本研究によって具体的な数値や結果を明らかにしリバウンドの重要性を知ることとは、筆者の今後の競技人生に影響を与えるばかりでなく、現在所属するチームそして今後所属するチームの戦術戦略に役に立てることができ、強いては成績向上の一助となるのではないかと考える。

【方法】

パソコン映像分析ソフト サイバースポーツを使用し、2010-2011 年度全日本大学女子バスケットボール選手権大会の全 66 試合 12,977 シーンを対象とし、6 つの分析項目（オフENSEスリバウンド、ディフェンスリバウンド、トータルリバウンド、2 ポイントシュート、3 ポイントシュート、トータルフィールドゴール）についてタグ付けを行った。

【結果】

① リバウンドの結果

オフENSEスリバウンドにおいて勝ちチームと負けチームの間に有意な差は認められなかったが、ディフェンスリバウンド、トータルリバウンドにおいては勝ちチームが有意に高い値を示した。

② シュートの結果

2 ポイントシュート、3 ポイントシュート、トータルフィールドゴールの全項目においても勝ちチームが有意に高い値を示した

【考察】

① リバウンドの結果に対する考察

オフENSEスリバウンドは、ディフェンスリバウンドよりも機会が少なく、またシュート率にも大きく影響されるため、この項目での勝ちチームと負けチームには大きな差異が見られなかったのだと考えられる。

ディフェンスリバウンドを奪取することでシュート数にも影響を及ぼすと考えられる。なぜならば、セカンドチャンスがなく、1 攻撃で 1 回もしくは途中でターンオーバーをすると、0 回と言うことも考えられるため、ディフェンスリバウンドを多く奪取するという事は、相手に大きな威圧そして脅威を与えることとなると考えられる。そのため多く奪取することが相手の攻撃、シュート数を減らし、そして自らを優位にさせることにつながると考えられる。

トータルリバウンドにおいては、分析結果から 60% 以上はずれた後のリバウンドを対戦相手より多く奪取することが優位に勝率を上げると考えられる。

② シュートの結果に対する考察

2010-2011 年度の間のルール変更により、コートデザインが変更し 3P ラインが広がった。この影響を大きく受け、ローポスト、ミドルポストのターンアラウンドシュートなどは、慣れが出てくるまで一時的にシュート率が下がるのではないかと考えた。次に、ペリメターのシュートについても 3 ポイントラインの拡大により、ペリメターの面積が広がったため、ここも慣れが出てくるまで一時的に多少はシュート率が下がると考えた。

【結論】

オフENSEスリバウンドは勝敗にあまり影響しないようだが、ディフェンスリバウンド、トータルリバウンドに関しては、大きく勝敗に影響すると考えられる。